

大学生の容器包装廃棄物の排出実態について

開発情報工学研究室 中川公平

1. はじめに

近年、生活様式の多様化に伴い「循環型社会」への転換が必要とされている。一般廃棄物の減量化や再生利用を促進すべく社会的に容器包装廃棄物の処理について大きく取り沙汰されている。1995年6月に容器包装リサイクル法が成立したのもその要因の一つであろう。本研究では廃棄物排出実態に顕著に特徴が見られるであろう大学生に着目し、鳥取大学工学部「廃棄物・環境管理」の講義受講生の廃棄物排出状況についてアンケート調査を行い、そのデータをもとに大学生の排出実態を明らかにし分析・検討を行なった。

2. 分析方法

学生への廃棄物排出状況のアンケート、容器包装廃棄物分別状況のアンケート、鳥取県東部広域行政管理組合の不燃物処理施設への不燃物搬入実績データを用いた地区別容器包装廃棄物の排出量についての分析を行なった。方法として一人一日当たりの数量・重量・容量等の分析を行なった。

3. 結果

大学生の排出状況については、紙製の廃棄物が多くなるという結果になった。また、飲料系を占めるスチール缶やアルミ缶を含む金属製、ペットボトルや弁当容器を含むプラスチック製が大きな値を示すと思われたが少ない値となった。

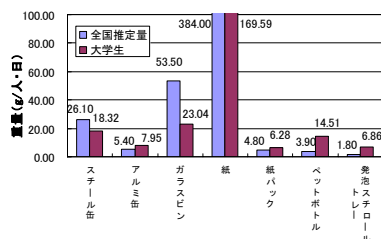


図1 全国推定値との比較

容器包装廃棄物分別状況については、かなり誤った排出結果となっている。特に食品トレイ、プラスチックゴミにおいて誤った分別をしていることがわかった。図2中に見られる小型破砕ゴミの90%以上の人々が誤っているが、データ数が非常に少ないため信頼できない結果となっている。

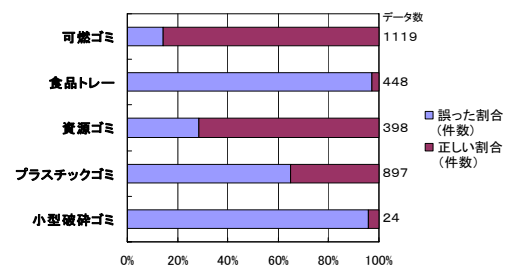


図2 分類別件数での正しいか誤りかで見えた場合

地区別容器包装廃棄物の排出については、割合として他の地区と比べて湖山地区に特徴の有る結果となった。特徴としては全体的に湖山地区が他地区に比べて少なくなっている結果となった。

住民属性による排出量原単位の重回帰分析推定については、大学生と一般人で見られるかを分析した。その結果、通学者・通勤者・その他の世帯では通学者・その他がマイナスというおかしな回帰式が得られたが、通学者・通勤者の2つの説明変数の回帰式は先の回帰式よりも信頼できる式が得られた。しかし、地区別の割合結果から考えると矛盾した結果となってしまった。

4. まとめ

各分析結果により大学生の排出実態に分別状態が悪いという特徴が見られることが分かった。今後は、データ数の蓄積などの見直しや対策についての検討必要となってくる。